第２章
健康への影響

受動喫煙は子どもたちの健康にどのような有害作用を及ぼすのだろう？

受動喫煙は原因不明の乳児の突然死のリスクを上昇させる

受動喫煙への曝露により、乳幼児突然死症候群（SIDS）のリスクが上昇する。これは 12 ヵ月齢以下の乳児で起こる原因不明の死亡である。米国、英国、オーストラリア、ニュージーランド、スカンジナビアで実施された 10 件の疫学的研究で、このリスク上昇が認められた。これらの研究全てで、母親の喫煙と SIDS との関連性が検討された。いずれの研究でも、母親が喫煙している乳児は SIDS で死亡する可能性が高いことが明らかだった。父親やその他の喫煙者が家の中で喫煙している場合もリスクが上昇することが認められた。受動喫煙への曝露が SIDS の原因となるという証拠は一貫性があり、強固なものである (3)。

受動喫煙への曝露と関連した SIDS のリスク上昇には、受動喫煙の煙に含まれ、神経毒性を有するニコチンやその他の成分が関与している可能性がある。このような成分は脳の発達および呼吸調節を妨げ、その結果として SIDS のリスクを上昇させると考えられる。さらに、曝露により乳児が呼吸器感染および肺刺激に過敏性となり、呼吸が障害されて SIDS の原因となる可能性もある。

受動喫煙は新生児の低体重の原因となる

妊娠中に母親が喫煙していると低出生体重児（5.5 ポンド未満（2.5 キログラム未満））が生まれるリスクが上昇する。一酸化炭素やニコチンは胎児への酸素の流れを阻害するとともに、子宮から臍帯への血流を減少させる。このいずれの事象も発育中の胎児の発達を遅らせる可能性がある。受動喫煙にさらされた母親から生まれた新生児は、さらされていない母親から生まれた新生児に比べて、低出生体重児となる可能性が約 20%高い。幾つかの国で実施された多くの疫学的研究は、妊娠中に母親自身が喫煙していなくても、周囲に喫煙者がいる場合には、影響力は小さいとしても、出生体重に同様の影響が及ぶことを示している。最後に、受動喫煙にさらされた女性から産まれた新生児では、さらされていない母親から産まれた新生児よりも体重が平均で 30 グラム軽い (3)。